

## 1 道徳教育と道徳の時間

- 「行い」と「心の中」。道徳教育は、「心の中」に焦点を当てます。

道徳性や道徳的実践力という内面的資質を育てるのが道徳教育、道徳の時間。  
将来出会うであろう様々な場面、状況においても、道徳的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し、実践することができるような内面的資質です。

- 道徳教育とは、人間が本来もっている人間としてよりよく生きたいという願いやよりよい生き方を求め実践する人間の育成を目指し、その基盤となる道徳性を養う教育活動です。

一人一人の子どもが、自分の心の中にある、よりよく生きようとする生き方（道徳的価値）の値打ちに気づき、自信をもって生きていこうとする意欲や態度を養います。  
小・中学校の道徳の内容は、四つの視点で整理されています。

- 1の視点…… 主として自分自身に関する事
- 2の視点…… 主として他の人とのかかわりに関する事
- 3の視点…… 主として自然や崇高なものとのかかわりに関する事
- 4の視点…… 主として集団や社会とのかかわりに関する事

- 「体験による道徳教育」と「考え合いによる道徳教育」で道徳性を育てます。

体験のしっばなし、机上の話合いだけでなく、「体験」と「考え合い」の両者が子どもを育てます。このことを、「授業観の育成」に例えてみると……。  
当然、道徳の時間に「考え合う」道徳の内容は、「体験」による豊かな心の貯め込みがあるからこそ、深まり、子どもたちのものになっていきます。

- 学校全体で、道徳教育に取り組みましょう。

道徳教育や道徳の時間に、学校全体で取り組んだ学校の成果として、次のようなことがあります。

- 生徒理解が進んだ。
- 数学の授業が変わった。
- 職員室に道徳の話題が出る雰囲気が出た。道徳の授業がうまくいかなかったことなどが、自由に話せる雰囲気が生まれてきた。
- 生徒が楽しみにするようになった。
- 子どもたちを、信じて認めて任せ、児童会や生徒会などの特別活動が充実した。
- 小・中学校の交流で、それぞれの学校の授業が変わってきた。

## 2 道徳性の発達

今一度、道徳性の発達に注目しましょう。

アノミー → 他 律 → 社会 律 → 自 律

## 3 「道徳的価値の自覚を深める」のが道徳の時間。その充実のために必要なこと

- (ア) 心の中（考え方、感じ方、在り方、生き方）に考え合いの焦点が置かれていること。
- (イ) 「何を伝えるか」ではなく、「何を考えさせるか」という教師の姿勢があること。
- (ウ) 各場面の心情を考えるだけや心情の変化を読み取るだけの読解の授業にしないこと。
- (エ) 授業の前提として、共通の話題となる読み物資料の読解ができていないこと。
- (オ) 子どもたちが、「えっ？」と考え込み、その子らしい考え方や感じ方、これまでとは違う考え方や感じ方と出会える「道徳の問い」＝「中心発問」「基本発問」があること。
- (カ) 子どもの発言の中に眠っているダイヤモンドの原石を見つけ、立ち止まれること。
- (キ) 切り返しの発問によって、より深く考え、揺さぶりの発問によって、視点を変えることができる。言語活動を充実させ、思考を深められるようにし、みんなで原石を磨く。
- (ク) 心を育てる豊かな体験を通して、心の中に貯め込みがあること。
- (ケ) 心の扉が、少し開いていること。

## 4 道徳の時間の充実のための工夫や手立て

- (ア) 心のノートも、活用し、授業のねらいを子どもの意識で考えよう。発達の段階も重要。
- (イ) 道徳の読み物資料に書かれていることや行動を答えるだけの発問にならないようにしよう。子どもの意見が行動や状況のときは、切り返そう。行動の奥を問う本物の発問。心の中を問う発問を大切に。
- (ウ) 登場人物の道徳的な変容や成長のときが、立ち止まりポイント！ その心の中や何が変容や成長を促したのかを、みんなで考え合おう。
- (エ) 広がる発問、深まる発問、多様な返答や意識が期待できる発問を。子どもの発言の最大の理解者は、周りの子どもたち。机上を見る、前を見る、友達を見る。「友達を見る」授業にしよう。そのために教師は、分からないふりをすることも大切。
- (オ) どんな状況かを問う「どうして」と、どんな考えからなのかを問う「どうして」の違いに敏感に。道徳の時間は、後者の「どうして」を大切に。
- (カ) プラス志向の「はひふへほ」の授業に。子どもの手柄を教師が取って言ってしまうないように。道徳の時間にしゃべるのは子ども。教師は、普段の生活の中で、熱く語ろう。
- (キ) 「書く」活動は、メリットとデメリットを考え、ここぞというところに限定しよう。
- (ク) 板書は、①資料読解を助ける、②思考の場、③子どもたちが発見したことのまとめの役割がある。板書を工夫し、思考の跡が見え、発見したことがイメージで分かるものに。
- (ケ) 子どもが発見し、納得できる授業にしよう。そして、子どもの言葉でまとめよう。  
「こういうことなんだよ」から、「こういうことなんだね」へ。
- (コ) 自作資料にも、挑戦しよう。道徳授業や資料を見る目が養われます。
- (ク) 休み時間には、子どもといっぱい、雑談をしよう。

【資料 1】 道徳の時間とは

道徳の時間にする事 →

**道徳的価値の自覚を深める**

**自己の生き方についての考えを深める (小)**

**人間としての生き方についての自覚を深める (中)**

**I 道徳的価値について理解する。**

(資料の中の主人公や友達のととの出会いを通して、)

こういうことって大切なことなんだな。こんな生き方があるのか。  
こんな考え方ってとてもいいなあ。いろんな考え方があるんだな。

**II 自分とのかかわりで道徳的価値をとらえる。**

(資料の中の主人公や友達のととの考えと自分の考えとを比べることで、)

自分はどうかだろうか。自分にもこんないいところがあるぞ。  
自分はこんな考え方だ。こういう考え方って自分にはない考え方だ。

**III 道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題を培う。**

(新たに見えてきた自分との出会い)

こんな考え方を自分もできるといいなあ。こんな生き方をしてみたい。  
自分のこんな考え方や生き方を大切にしていこう。

【資料 2】 道徳の時間の基本的な進め方

導 入	主題に方向付ける (向く) ・ 資料にかかわる導入 → 関心を高める。 ・ ねらいにかかわる導入 → 課題意識を高める。
展 開	資料を通して、ねらいとする道徳的問題をみんなで追求し合う (つかむ) 前 段 ・ 中心発問…… ねらいに最も近づく中心課題となる場面の発問。 ・ 基本発問…… 中心発問の問題追求を一層効果的にする発問。 ・ 補助発問…… 子どもの意見をより明確にしたり、深めたりするための発問。 後 段 より深く、自分とのかかわりでとらえる (見つめる) ・ 資料での話し合いを、各自の生き方についてさらに見つめることで、自覚を深めることができるようにする。
終 末	ねらいとする道徳的問題のまとめ (あたためる) ・ 余韻を残したり、印象に残る端的なまとめをしたりする。上手なまとめは、子どもの言葉を使ったまとめ。